

平塚らいてうを記念する会二十年

らいてう碑を今年こそ

榎田 ふき

歲月人を
俟(ま)た
ずとはまこ
と。大地震、
サリン事



件、沖縄問題、中・仏核実験と打ち続け
いまわしきこと毎に心砕き、行動強いら
れるうちに早くも迎春、一九九六年とな
った。戦後五十年めの声ごえ
は賑わったものの、すべては
先送り、「めでたさも中ぐら
いなり」の新年である。

迎春

タヒチに響いた核実験阻止
の叫びは、いまま核廃絶の願
いとなって鳴りやまない。第
四回世界女性会議・NGOフ
ォーラムに結集した「平等・

開発・平和」をめざす運動の結語は「北
京宣言」となり、世界女性の草の根運動
となつてすすめられている。また米兵の
暴行事件を機に、「基地強制使用」の代
理署名を拒否した大田沖縄県知事の勇気
ある決断に日本の良識は共鳴、沖縄県民
総決起大会に続いて、沖縄に連帯する集
会やデモは全国に拡がっている。

「烈しく欲求することは事実を産む最
も確実な真原因である」と、らいてうが
励ます。いつそう烈しく欲求してたたか
いつつ、今年らいてう没後二十五年を意
義づけて、茅ヶ崎にらいてう記念碑の建
立実現をと念じている。(世話人代表)

新しい太陽に期待して

村松 保枝

「頌春 命とくらしをまもる みんな
のたたかひの中から 平和な未来が生ま

れる 新しい太陽がのぼる らいてう」

平塚先生が新婦人しんぶんの一九七一
年新年号に書いて下さった言葉である。

先生には新年号の一面に飾る言葉を毎年
書いていただいた。これは前年暮れ、代々
木病院の病床を訪ねて書いていただいた
もので、先生の最後の作品といえる。ベ
ッドの上では文字に力が入らないといわ
れたが、その筆の文字は女たちのたたか
いを展望した言葉に力を与えていた。

初めてお会いしたのは、平和ふじん新

聞の記者の頃(一九
五三年)であった。



刺繍のある紫の半衿
が優雅なお顔に似合
って、その古風な美

しさに魅せられた。それからたびたびお
宅にうかがい、先生手料理の新鮮な野菜
サラダとパンなどをよくごちそうになつ
た。まだ食糧難の続く時代で、そのおい
しかったことが今も忘れられない。

先生からいただいた「元始、女性は太
陽であった」八十三歳の書は、私の家の
玄関に現在も大切に飾ってある。

(会員、新婦人しんぶん編集長)



宮本百合子と平塚らいてう



作家 松田解子さん



らいてう研究者 小林登美枝さん

今年の一月二十一日は宮本百合子没後四十五周年にあたります。百合子とらいてうについて、松田解子さん（多喜二・百合子賞受賞作家、会員）と、小林登美枝さん（らいてう研究者、常任世話人）に語り合っていました。

*

小林 松田先生は昨年七月、満九十歳を迎えられ、秋の「卒寿を祝う会」には私も出席させていただきましたが、ますますお元気でおめでとうございます。

松田 私ね、この対談をいい機会だと思って、らいてうさんの自伝「元始、女性は太陽であった」を

無類の生き方に学ぶ

松田 戦時中には治安維持法のもとで、どれほど国民は痛めつけられたか。夫が労働運動をしていただけのザコとわかつている私の家にも、特高と制服が五人も来て、米びつや漬物おけまでひっくり返していくんだから。その時『共産党宣言』を丸写しした大学ノートがみつかったら。あの頃はそんな本一冊でも宝物のようにまわし読みして、まるで酔っぱらったみたいに感激してさ。それを「こ

もう一度読み返して来たんですよ。小林 えっ、全四巻をですか。

松田 ええ、二種類の目録をさしながら、四、五日かけてね。

小林 まあ、すごいですねえ。

松田 りいてうさんには戦後一度お目にかかっただけなんです。一九五〇年代に衆議院議員会館の会議室で、女ばかり二、三十人。あれは何の集まりだったのかしら。へえー、この方がらいてうさん、と思って。あの大きなスケールを感じさせる思想家が、おとなしやかな声の低い上品な女性で、意外でしたね。一度だけでもお目にかかれたからこそ、この人の内側にあんなに激しく燃えるものがあつたんだとうなずけました。

松田 百合子さんと出会ったのは

小林 私は、らいてう先生とは一九四八年、時事通信社主催の座談会で初めてお目にかかりました。百合子さんとは一九四六年に、婦人民主クラブ創立の時の発起人の一人として出会いました。

で私も仇討ちみたいに本気で書く気になって。そんな時期の百合子さんの日記。夫の顕治さんの公判が始まった一九四四年九月のね。「極めて強烈な印象を与える弁論であった。詳細にわたる弁論の精密適切な整理構成。あくまで客観的事実に立ってそれを明瞭にしてゆく態度。一語の形容詞なく、『自分としての説明』も加えず。胸もすく堂々さであった（略）。リズムというものの究極の美と善（正直さ）を感じる。深く深く感動した。」（九月二日の日記）

敗戦前年の秋、だれもが今夜も空襲があるかな、という以外には何も考えられなかった時期に、戦争は遠からず敗北するという先見性と真実は必ず明らかになるという確信をもって、戦時下の法廷でたった一人、飾らぬ弁論で闘う男。その緊密な理論的追求をたった一人で傍聴する妻。この時代にこういう生き方をした人がいたことは励まされるし、二度とくり返させ

一九三〇年、ソビエトから帰国されてまもなくでした。翌月にはプロレタリア作家同盟に入られたので、私もよく湯浅芳子さん（ロシア文学）と同居の目白の家や、結婚した顕治さんが検挙されたあとは林町の百合子さんの実家での集まりに参加しました。百合子さんの発言はいつもの確で、私なんかにもよくわかる日常的な言葉で明快に語る。それでいて忘れがたい重さと深さがあるんですよ。それに自分も早口で大いにしゃべるけれど、他人の発言もよく聞いて、その中の評価すべき点は必ず取り上げて生かしてくれましたね。

小林 私も百合子さんの頭の回転の早さと豊富な言葉を駆使した会話にはよく聞き惚れました。物静かならいてうとは陰と陽ですね。



らいてう（右）と百合子



ぬという決意をさせてくれるわね。小林 「善（正直さ）」という点からみれば、らいてうの正直さ、率直さも無類ですね。塩原でも本気で死のうとしましたし、奥村博史への結婚についての質問状もそうです。らいてうと百合子は境遇も似ていますが、感覚も似ているんですね。年齢はらいてうが十三歳年上ですが、実家も近くで、誠之小学校、お茶の水高等女学校、日本女子大と通った学校も同じ。学校教育への反発も共通です。自己を全面開花させようとする能動性も、年下の夫を選んで対等に生きようとする姿勢も似ていますね。松田 平和と民主主義を求めて闘った優れた先達の業績を知って継承するためにも、二人の著書をよく読んでいただきたいですねえ。

聞こえますか らいてうからのメッセージ

没後二十五年らいてう忌

日時 五月四日(土) 午後二時

会場 東京ウイメンズプラザ

渋谷区神宮前五―五三―六七
地下鉄「表参道」駅から七分

講演 落合 恵子

独唱 檀上 さわえ

講談 宝井 琴桜

参加費 三〇〇〇円

申込先 渋谷区千駄ヶ谷四―一―一九

―三〇三 平塚らいてうを記

念する会

☎〇三―三四〇―一六一四七

FAX 五四七四―五五八五

振替 〇〇一五〇―九―五五

三〇四六

☆チケットは一月下旬から発売の予定。

料金をそえてお申し込み下さった方

にチケットをお送りします。会場の座

席の都合で先着三〇〇人でしめきりま

す。チケット代金は「らいてう忌集会

の参加費」と明記してお送り下さるよ

うおねがいたします。

らいてう遺品の

移転先を模索中

現在、憲政記念館に預かっていただいでいる平塚らいてうの遺品は、来年予定されている同館の改装工事にともない、移転をせまられています。前号のニュースでお知らせしましたように、世田谷文学館に開館前から寄託の交渉を続けてきましたが、書籍以外は収納スペースがな

いとの理由で、結局不可能になりました。

常任世話人会では、一時的な移転先を探すとともに、常設展示もできる会館の建設についても真剣に検討をしていくことになりました。(写真は「らいてうをしのぶ展」会場より)

*らいてうテレカ

テレホンカード(らいてうの写真、長沼智恵子の「青鞥」表紙絵、らいてう筆「元始女性は―」三枚セットで二千七百円、一枚は千円

*会費納入のおねがい

一九九五年度分の会費が未納の方は振込みをおねがいたします。

個人年額 一口三千元

団体年額 一口五千元

振替 〇〇一五〇―九―

五五三〇四六 平塚らいてうを記念する会

てうを記念する会

